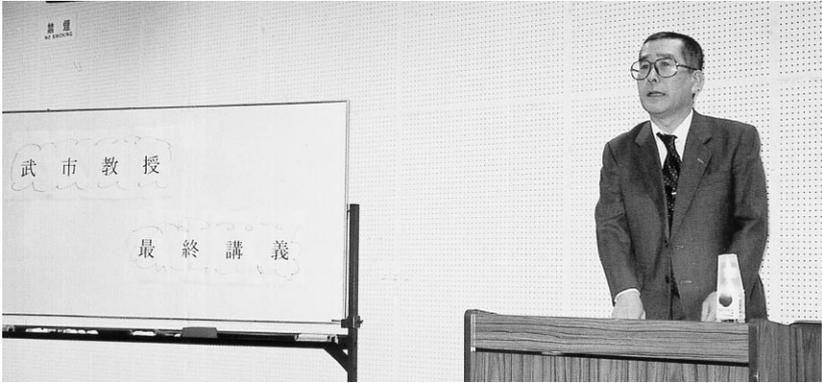


ISSN 0288-5913

コミュニケーション研究

第 32 号

上智大学コミュニケーション学会



最終講義中の武市英雄教授（2002年1月17日）



最終講義終了後、花束を受ける武市教授



最終講義の後開かれた「武市教授を囲む会」で熱唱する武市教授



「武市教授を囲む会」出席者と記念撮影



日常の講義風景
(1997年7月1日)



ミネソタ大の恩師、
ニクソン先生夫妻と
(1989年11月19日)

武市英雄先生への謝辞

新聞学科長 石川 旺

1970年以来、新聞学科の教壇に立ってこられた武市英雄先生は本年3月をもって退任されます。

先生は1960年に本学文学部英文学科を卒業されてから、読売新聞社に入社され、金沢支局、地方部、内信部などに勤務される一方、1967年から1968年にかけてはミネソタ大学大学院修士課程（ジャーナリズム専攻）にフルブライト留学されました。1970年4月に本学文学部新聞学科に専任講師として就任された後、1974年に助教授、さらに1981年には教授に就任され、教育・研究に精励されました。学部では、「国際コミュニケーション論」、「外国ジャーナリズムⅠ（アジア）」や同「Ⅲ（北米）」「新聞論」「編集論」などをはじめ数多くの科目を担当され、また大学院でも「米州のマス・メディア論特講」「国際コミュニケーション論特講」などの科目を担当されながら、数多くの学部生・大学院生を育成されました。

また、学内でもさまざまな役職を歴任されました。1977年からと1991年からの二期に渡って新聞学科長を務められたのをはじめ、本学学事部長（1986-1989）、『ソフィア』編集長（1983-1986）、大学院文学研究科委員長（1997-2001）、社会正義研究所所長（2000-2002）など、大学全体に対しても大きな貢献をなさいました。

先生の学外でのご活躍も幅広いものでした。学会におきましては「日本情報通信学会」の理事（2000-）、「日本新聞学会」の理事（1985-1987）、「日本マス・コミュニケーション学会」の理事（1991-1995）、同会長（1999-2001）、などを歴任されました。また、研究活動におきましては、1980年に国際交流基金の派遣により、アテネオ・デ・マニラ大学の客員教授、1980年にはフルブライト上級研究員としてミズーリ大学客員研究員、1988年と1996年にはそれぞれ、ミネソタ大学とアイオワ大学で客員研究員を務められました。

武市先生のご研究は、実務の経験を生かしたジャーナリズムの分析・研究から、日本のジャーナリズムの歴史、さらには国際的な視野に立ったメデイ

石川 旺

ア・ジャーナリズムの分析・研究にまで裾野を広げておられ、広い視野に立って知的財産を積み上げてこられました。このような先生の下で研鑽を積み、大学教員や研究者として活躍している卒業生も多数ある一方、ジャーナリズムの実務の現場に就職し、先生の教えを日常の仕事の中に受け継いでいる者もまた多数居ります。

先生は学生との交流ではいつも穏やかで親しみあふれる存在でいらっしゃいました。アルコールは余り大量には召し上がりず、もっぱらおしゃべりで年月を過ごしてこられました。近年その状況に大変化が生じ、「武市先生といえばカラオケ」という評判が定着するに至ったのには、私どもも心底驚きました。でも心から楽しそうに歌っておられる武市先生もまたよきかなでした。

このたび、大妻女子大学の新しい学科の設立メンバーとなるために本学を去られるのは誠に残念ではありますが、上智大学新聞学科としましては、親しく交流し合える大学がまた一つ増えるという意味で、前向きに喜ばしく受け止め、先生の今後のご活躍を心からお祈り申し上げます。先生の長年にわたる御貢献に心から感謝申し上げます。

2002年2月1日

武市英雄先生略歴

1937年6月4日生

1960年 上智大学文学部英文学科卒業

1960年 読売新聞東京本社編集局入社

1967-1968年 フルブライト留学（ミネソタ大学大学院修士課程／
ジャーナリズム専攻）

1970年 上智大学文学部新聞学科専任講師

1974年 同 助教授

1977年 同 新聞学科長（-1979）

1981年 同 教授

1983年 『ソフィア』編集長（-1986）

1986年 上智大学学事部長（-1989）

1991年 文学部新聞学科長（-1993）

1997年 上智大学大学院文学研究科委員長（-2001）

2000年 上智大学社会正義研究所所長（-2002）

学会活動

- 日本新聞学会 理事（1985-1987）
日本時事英語学会 会長（1991-1993）
日本マス・コミュニケーション学会 理事（1991-1995）
会長（1999-2001）
日本情報通信学会 理事（2000-）

主な業績

（著書）

- 『日米新聞史話—ニュースの変遷をたどって』 福武書店 1984
『マス・コミュニケーション概論』（共著）学陽書房 1982
Communication Ethics and Universal Values（共著）
Sage Publications, CA., 1997
『日本のマス・メディア』（共編著）日本評論社 1998

（翻訳）

- 『グローバル・コミュニケーション』（共訳）、H.H.Frederick著 松柏社
1996

（論文）

- 「アメリカにおけるジャーナリズム教育」日本大学法学部編『メディア研究の諸領域』日本大学法学会 1999
「新しい新聞学への脱皮」『新聞研究』No. 558, 1998年1月号.
“Ethics Problems of the Japanese Mass Media”『コミュニケーション研究』
No.25, 1995.
「米国大学のジャーナリズム教育」『新聞研究』No.514, 1994年5月号.
「近代言論の生成に関する日韓比較」『コミュニケーション研究』No.21,
1991.
「社会的メディアとしての大学」『上智大学の未来像』南窓社 1988
「報道被害とその救済方法—プレス・カウンスルの可能性」『マス・メディアの現在』（法学セミナー増刊・総合特集シリーズ35） 1986.

最終講義「ニュースの変遷をたどって －私とニュースとの出会い－」

武市 英雄

多くの人びととの出会いに感謝

本日（2002年1月17日）は私の上智大学での最終講義にたくさんの皆様がお集まり下さいましてありがとうございます。中には遠くからお越し下さった方もいらっしゃいます。ほとんどの方がたはお忙しいところを貴重なお時間を割いてお越し下さったと思います。心より感謝申し上げます。

大学というところは「すばらしい知的な出会いの場」だと思います。この32年間にたくさんのすばらしい先生方にお会いできたこと、さらにいろんなタイプの若ものたちに接し、教えるだけでなく、逆にいろいろ教えられることも多かったことに、心からお礼申し上げたいです。世代を越えてコミュニケーションを行うことができるという点が学校のすばらしいところだと思います。大学に身をおくことができたからこそ、体験できた貴重な事柄はいっぱいあります。とても幸せな32年間でした。

新聞社（読売）に10年間、大学に32年間居たのですが、私にとってこの二つの世界は切っても切れない関係にあります。前者はジャーナリズムの現場であり、後者はジャーナリズムの教育・研究の場であったわけですが、両者とも社会に向かって何らかのメッセージを発信しているところです。新聞は一日一日のメッセージを発信しているのに対して、大学は毎日とはいえないにしろ何か情報を伝えたり、考えるべき社会問題を投げかけています。それは公開の講演会やシンポジウムや研究誌などを通して、専門の研究者だけでなく、地域の一般市民に対してもコミュニケーションをしているのです。学生たちには授業を通じて日々の情報を伝えるだけでなく、社会人になって何年も、あるいは何十年も経てから初めて分かってもらえるようなメッセージを教員たちは伝えています。まさに何かを伝えるという行為においてはジャーナリズムの世界も大学の世界も同じです。私は二つの共通の場にまたいで

武市 英雄

体験できたことを人生の大きな喜びと感じています。

1960年3月、私は上智大学文学部英文学科を卒業して4月から10年間、読売新聞社の記者として働きました。勤務中はほとんど毎日、ニュースを書いていたのですが、勘で書いていたようなものです。何となく「ニュースとはこんなものであろう」と思いながら仕事をしていたので、入社5、6年もしますと、ニュースについてもっと理論的な裏づけができるように、しっかり勉強したい、という希望が高まってきました。幸い母校の英文学科のヨゼフ・ロゲンドルフ教授と刈田元司教授、そして当時の新聞学科学科長の川中康弘教授のご支援があり、アメリカのミネソタ大学大学院（ジャーナリズム修士課程）にフルブライト留学をすることができました。ミネソタではおもにアメリカのジャーナリズム史と国際コミュニケーション論をそれぞれアメリカでの第一人者の研究者であるエドウィン・エメリー教授とレイモンド・ニクソン教授から直接指導を受けることができ、あわせてニュースの何たるかを理論的に学ぶこともできたのです。

そういう意味では母校のロゲンドルフ、刈田、川中各教授とミネソタでお世話いただいた二人の恩師たちには一生忘れることができません。とくに川中教授には帰国後、私を母校の教壇に立つ機会を与えて下さった方で、私にとっては本当によき先生方に恵まれたと感謝しております。母校の三先生もミネソタの両先生もいまや故人になられており、恩返しの手がありません。せめて私が先生方から受けたご恩を若い学生たちへ伝え“返し”てあげることしか、いまではできません。また上智大学新聞学科に移ってからは、ミネソタ大学の先輩の小糸忠吾教授が学科の先輩教員のお一人としてご活躍していらっしゃる、教育・研究に注がれる先生のバイタリティーに感銘するなど、大いに学ぶ点が多く、知的に啓発されるところが多くありました。

ニュースの変遷の前提

今日のお話のタイトルは「ニュースの変遷をたどって—私とニュースとの出会い」です。

このテーマの背景には次のような前提があることを述べておきたいと思います。

第一は各時代ごとに要請された“ニュース概念、ニュース価値基準”があ

るのではないかと、ということです。プレスは各時代の知的な産物であると同じように、ニュースも時代の知的産物で、各時代によって求められるニュースがあるのではないかと考えます。

第二はこれに関連して、ニュースとは“生き物”で“進化”するとの考えです。だからこそ、各時代のニーズに基づいたニュースが存在するのだと思います。

第三は、ニュースの受け手は未来のニュースをまさぐって、それをメディア側へ要求する声をあげてもよいのではないかと、ということです。そもそもプレスは受け手なしに存在し得ません。ニュースは送り手と受け手の両方が存在して初めて成立するものです。もっと受け手側が、これからの新しいニュースについて積極的に発言すべきではないかと考えます。

第四は、ニュースは“進化”し、各時代のニーズに基づいたものが存在するという考えは、日本だけでなく、他の国のメディアについても言えるのではないかと、という点です。

第五は、ニュースは“進化”するということは「異常性」「新奇性」を伝統的なニュースと見なしていたのが、しだいに「日常性」「社会的構構性」「共感性」へと移行しているのではないかと、ということです。

駆け出し記者時代のニュース

私は1960年4月1日に読売新聞社に入社したのですが、実際に自分の書いた記事が紙面に載ったのはその前です。入社前にすでに自分の書いた記事が掲載されているのです。

なぜかという、当時、本社は選挙か何かで大変忙しくて、人手が欲しかったのでしょう。希望する者は1ヶ月半前からアルバイトに來い、との知らせが来て、私は行かなければならないのかと思って、それに応じたのです。あとで分かったのですが、編集局に29人入社して、このうちアルバイトに來たのは6、7人のみでした。決して強制ではなかったようです。

1週間ぐらいずつ地方部、連絡部、婦人部などにまわされ、編集の下働きをさせられました。世論調査室のアンケートの手伝いで都下の住宅団地を歩きまわったこともあります。婦人部で手伝っていた時、「私の買い物」という小さなこみ記事があり、取材を命じられました。腕時計、パン、結婚式場案内などの取材のテーマが与えられ、取材の勘どころを聞かされたあとと銀

武市 英雄

座やその周辺へ出かけました。腕時計の記事は4月からの新入社員向けの内容にせよとのことで、銀座の有名な時計店へ行き、社会人1年生向けの時計の選び方や値段などを聞いて、まとめました。ところが先輩の女性記者からズタズタに直されてしまったのです。それでも“自分の”記事が紙面に登場した時は、うれしくなり、家族に「これは私が書いたものだ」と読むことを強要したものです。

やはり同じ先輩女性記者から「取材は責任者から直接話を聞くこと」と助言されていたので、ある有名な結婚式場へ取材に行った時は受付の人に「社長に会わせて下さい」と頼みました。会議か何かで社長は忙しかったのでしょう。1時間ぐらい待たされてようやく会わせてもらえたのですが、見事に怒られてしまいました。というのは、こちらはまだアルバイト記者で名刺を持っていない。「社会人なら初対面の人に名刺を出すのが常識だよ、君」とお説教されてしまいました。学生時代のようにあまくはない、と後悔したものです。いくら責任者から話を聞くべきだといっても、実務の話は広報担当の部・課長レベルの人でよかったのに、なんと最高責任者を呼び出してしまったのです。

私の駆け出し記者時代は金沢支局から始まりました。当時（1960年4月）、石川県は東京本社管内では一番西の端に位置しており、隣の福井県は読売新聞大阪本社管内でした。富山・石川・福井は北陸三県といわれていますが、読売は東京・大阪の両管内に分かれていたのです。当時石川県へ配られる新聞の締め切りは本社で午後5時ごろでした。社で一番早い締め切りの県でした。なにしろ午後7時ごろの上野発の急行列車の郵便車両に新聞を運び込まないと翌日の朝に金沢に着かないのです。しかも運悪く、配達を委託している地元新聞社（北国）の販売店の配達が終わった後に列車が金沢に着くので、配達は地元紙の夕刊と一緒にしました。締め切りが早い上に、配達がおそいため、魅力ある新聞とはとてもいえない状態でした。

県内で読売はせいぜい800部ぐらいしか出ていなかったと思います。よほどプロ野球のジャイアンツが好きなのか、昔東京に長く住んでいたことがあり、なつかしいと思っている読者ぐらいしか購読してくれていませんでした。あとは県庁、市役所など公共機関がお義理で取ってくれているのにすぎません。

ですから読売の存在は実にうすく、はじめて金沢駅に降りてタクシーに乗って「読売の金沢支局へ行って下さい」と言っても、運転手は「うーん」となるだけで、場所がすぐ分からないありさまでした。当時は一般市民が「けさの新聞にこんなことが載っていたよ」という会話での「けさの新聞」は地元紙の北国新聞を意味していたと思います。朝日、毎日、読売の全国紙三紙は大都会では普及率が高く、存在感が大きいにしても、大都会を遠く離れるほど影響力が薄まるという現実をまざまざと見せつけられたのはこの頃です。

たたき込まれた取材の基本

新人の仕事はまず警察担当から始まるものだ、と本社の約三週間の研修で先輩記者から聞いていた通り、金沢支局ではじめに私に与えられた仕事はやはり警察記事の取材でした。警察記事は「いつ、どこで、誰が何をした。それはなぜか、どのようにしてか」(5Ws1H)という記事の基本を習得するのにうってつけの場です。また警察がニュースを発表する時があるにしても、ふだんは秘密第一主義のところ。そこから他社の知らないニュースを引き出すのは取材の基礎訓練の場としてもよいというわけで、新人記者はまず警察担当から始まるのが昔もいまも常識になっています。

おまわりさんと親しくするにはまず方言を身につける必要があります。人見知りなどしているヒマはありません。この警察まわりは新人記者として実によい勉強の場になったといえます。警察まわりを含めた入社数年中に学んだ体験をいくつか列挙してみると次のようになります。

むずかしい完全原稿

まず第一は完全原稿を書くのがいかにむずかしいか、ということです。記事はできるだけありのままに客観的に書くのが大切であることは誰でも分かると思いますが、それを実行することは決してなまやさしくありません。でき上がった記事を見ることと、バラバラの断片的な情報を一本の記事に仕立てることは全く別のことです。

私ははじめ先輩記者が書いた交通事故や火事や自殺などの記事を切り抜いて大学ノートにはっておきました。ヒナ型の記事に合わせて書けばよいと思い、これは実に簡単な仕事だとたかをくくっていたのです。しかし、いざ取

材をしたメモ帳をもとに記事に仕立ててみると、うまくいかないのです。

当時、原稿集めのバイクが記者クラブに来て原稿を支局へ運びます。原稿を出してしばらくすると支局のデスクから電話がかかってくるのがしばしばありました。「さっきもらった交通事故の記事で加害者の年齢が抜けていたよ」とか「火事原稿の火元の家業がなかった」などと指摘されるありさま。自分では完全原稿を書いたつもりでも、何かが欠けているケースが多かったのです。あんなに注意深く、チェックしたつもりなのに、また抜けていたところがあったのか、と不思議に思ったほどでした。

無駄骨を折っても正確さを期す

支局時代に学んだことの第二点目は正確を期すことのむずかしさです。新聞記事は正確でなければならないということは小学生でも分かっていますが、これを完全に実施するのはとてもむずかしいといわざるを得ません。ある日曜日、県警本部の当直室に立ち寄ると、輪島署から交通事故の速報が電話で入りつつありました。あとで速報票を見せてもらうと、加害者は「伊藤和男」となっています。和男という名前は文字の説明を受けながらメモしたと思いますが、「伊藤」という名字はどうだったか疑問になり、その点を質問しましたら、当直員は「だってイトウといたらふつうこの字でしょう」と返事。しかし私は「数は少ないけれども、伊東温泉の伊東だってあるんじゃないですか」と言うと、「たまにはあるでしょうけど」とのん気なことをいうしまつです。

心配になり県警本部の記者クラブの自社の電話で輪島署を呼び出したら、この事故は本署ではなく駐在所管内の事故なので詳しいことは分からないとの返事。当時の電話はダイヤル即時ではなく、市外電話係に申し込んでしばらく待たなければならない。ようやく駐在所につながったが、夫人の話によると、あいにく、ご主人は管内巡察に出たばかりで二時間後でないとは戻らない、とのこと。そこで別の取材の仕事をしてから再び電話を入れると「イトウ」は「伊藤」でよかった、ということが分かったのです。つまり、まちがいでないことを確認するだけで2～3時間かかってしまったわけです。一見、無駄とみえても、まちがいを避けるためには、あえてこのような手間ヒマをかけなければならない、ということを思い知ったのです。

ニュースは相対的

支局時代に学んだ第三点目はニュースの相対性についてです。1960年代初頭はまだ一般家庭で自動車を持っている人は少なく、車といったら営業車为中心でした。そのため金沢では交通事故はそれほど多くなかったと思います。ということは、ちょっとした事故でも珍しいので県版レベルでは記事になってしまったのです。今日ではあり得ないことですが、物損事故でも記事になりました。バイクが郵便ポストにぶつかって車の前部が少しこわれたけどケガはしなかったというケースでも記事に載ったのです。

ところが1962、3年になりますと、さすがに金沢でも事故が少しずつ増えてきました。小型のマイカー族が増えてきたためです。そうなると物損事故まで記事として取り上げていたら、1ページしかない県版は事故の記事だけでいっぱいになってしまいます。そこで無傷の事故や全治1週間以内の事故は扱わないことにしたのです。

はじめは単独の記事として扱っていた事故記事を、片すみに「きのうの事故」という柱をつけて、その後に行間をせばめて載せるなどスペースがかさばらないようにする工夫もしました。このように、「珍しさ」の度合いというものは時の推移によって変化していくのだということを認識したわけです。ニュースの価値基準は相対的であると感じました。

現場を見ることの大切さ

第四点目は現場を見てそこから考えることの大切さです。刑事が事件の現場を何回も訪れて、捜査の糸口をつかむように、ジャーナリストも現場を見て、現場から考えることがいかに大切かということを駆け出し時代に学びました。これは後に研究者になった時、原典、原資料から掘り起こして調べ、論文に仕立てていくことの大切さを知ったことに相通じるものだと思います。

なぜ現場を踏むことが大切かというと、警察の調書を見ただけでは分からないものを発見できるからです。警察官にとっては必要のない情報でも、ジャーナリストの視点からみると、大きなニュース性をもつ場合があるので

ある日、金沢市内で交通事故がありました。幼児が軽傷を負う事故で、先輩格の他社の記者たちは現場へ行こうとしませんでした。私はまだ新人でし

武市 英雄

たので、できるだけ現場へ行くように支局長から言われておりましたので、駆けつけました。たしかに6才の男の子がバイクにはねられ軽傷を負ったので、事故としては小さな記事でした。しかし取材をしていると、現場にいた母親が「1週間前にも一才年下の子が同じような事故に遭いました」という。詳しく話を聞くと、大通りのカーブでの事故で都会では当然信号機が取りつけられてもよいのに、そこにはないわけです。すると町内会長が私のところへ来て「ここは見通しが悪くてあぶないので、信号機をつけてほしいと県庁に何回も陳情に行ったのですがダメでした」と訴えたのです。

私は現場の写真を撮ったり、県警本部に信号機の予算について取材に行ったりして、金沢市内版のトップ記事に仕立てました。地元警察の交通警邏課の事故調書をあとで見せてもらって記事にするだけなら、1段見出しの小さな記事で終わっていたでしょう。しかし現場に行ってみたので、いろいろな“副産物”の情報を入手でき、少し角度の違った記事に仕立てることができたのです。現場取材第一主義の教訓を得たわけです。

ボヤでも「ボヤだから現場へ行かなくていいだろう」とたかをくくっていると、床の間の県文化財級の掛け軸を焼いてしまっているのに気づかないでしまうことがあります。

時には現場へ行くことに危険が伴うこともあります。金沢市郊外の土砂くずれの取材で支局の車で現場に着いたとたんに、再び土砂くずれが起き、あやうく車ごと飲み込まれるところでした。交通事故の現場へ行ったら、加害者が暴力団員でからまれかかったこともあります。

死の現場に立ち会うこと

警察関係の取材をしていると、ほとんどすべての死に方の現場に立ち会うことになります。首つり自殺、若い男女の服毒自殺、列車の飛びこみ自殺、水死、焼死など、自然死以外のありとあらゆる死に方を取材することになります。学習の第五点目は死に面することです。

人里離れた丘陵地の畑の中にある小屋で、首つり自殺をしていた老人の場合は、パトカーに乗せてもらって現場へ行ったために、警官がハリにまかれた縄を切って老人を土間へ下ろすのを下で抱きかかえる手伝いをしたことがあります。硬直している体に驚きました。人間は死ぬと体が硬くなってしまふことを初めて知ったわけです。

火事の焼け跡で人間の焼死体を初めて見た時も忘れられません。手や腰を折りまげた形でした。「さぞかし熱かったでしょうね」と現場検証中の刑事に言ったら「しかし本当に熱いと感じる前に、酸素不足で気を失ってしまっていたらろうから、それほどではないと思うよ」と返事をされたので、そのようなものかと思いました。

ひとつひとつの死体をみていると、その人なりの長い人生の最後の場に至る道のりを想像してしまいます。いろんな人生の曲折を経て、最終的にこのような姿になってこの世と別れを告げることになったことに、感慨深いものを感じました。この人の最期の場に自分が立ち会ったことで、この人の霊のために祈らざるを得ない気持ちになったものです。

固定観念にとらわれないこと

金沢支局時代に学んだ第六点目は、固定観念にとらわれてはいけないということです。入社した1960年は日米安保の改定論議が白熱した年です。労働組合や学生のデモが金沢市内でも時どきありました。とくに警察の建て物の前に来ると、しばらくとどまってシュプレヒコールをあげます。ある日、それを署内で見ていた年輩の警察官が目には涙をためているので驚いたことがあります。なぜ同じ日本人同士なのに、警官と学生たちとがぶつかり合わなければならないのか、と悲しく思っていたようでした。こういうタイプの人情味ある警官もいるのだと新しい発見に感動しました。

どの職場でも、その職場に合ったその仕事にぴったりの人物がいるものです。肩で風を切って歩く新聞記者、厳しい顔つきで尋問する刑事、といった仕事のイメージにぴったり当てはまった姿の人というものがいるものです。しかし、私は涙を浮かべている刑事の姿を見てから、本物の人とは、むしろその職業らしからぬ姿をしている人ではないだろうかと思うようになりました。一見刑事らしくない刑事こそ、本物の刑事かもしれません。いかなる職業でも、それらしい格好をする人は平均値的なところにいるのにすぎず、本物の人は、その職業の典型的な格好をしている人ではないのではないか、と覚えてならないのです。

偏見を持たずに、できるだけ客観的に公正に観察した現場から謙虚に学ぶことの大切さを認識したしだいです。現場の体験に裏打ちされた内容を記事化するすれば、それはきっと説得力のあるものになるでしょう。

幅広い関心を持つこと

第七番目に学んだことは、幅広い関心を持つことの大切さです。とくに新人記者時代は新しい分野のテーマへの関心を高めることが大切です。金沢支局時代の4年目に支局内の持ち場の配置換えがあり、1週間後から私は経済を担当することになりました。経済は大学時代に学んでいなく、記者になってからも積極的な関心を持っていませんでした。

そこで不安を感じたのですが、まず不安解消のために始めたのは全国紙の経済欄の記事を隅から隅まで読むことでした。はじめのうちは何が何であるのか分からない状況が、徐々に少しずつ分かってくる。そうすればもっと知りたいという欲求が出てくる。つまり「知識」→「関心・興味」→「さらなる知識」→「さらなる関心・興味」となり、自分の中にある潜在的な関心が掘り起こされてきます。つまり食わず嫌いにならずに、思い切って自分の不得手分野に飛び込むことが大切だと思うようになりました。

それにしても分からないことがたくさんありました。定例的に開かれる日本銀行金沢支店長の記者会見に出席して分からなかったことは、支店長が「今日の日銀券の発行高は…」という点です。日銀券とは何かと思ったのですが、あとで他社の先輩格の記者にたずねると「君本当に知らないの」と軽べつするような顔付きで言われました。そして「君の財布から千円札を取り出してみなさい。そこに何と印刷されているか」と言うわけです。つまり日銀券とは紙幣である、ということにはじめて気づいたわけです。いま考えると、ずいぶん頼りない経済記者だったと思います。思い出すだけでも冷や汗がでます。

取材の対象者への感情

第八番目に学んだのは取材対象者との関係についてです。駆け出し記者時代はまず事実を正確に、締め切り時間内に書き送ることで頭がいっぱいでした。それ以外の感情が入り込む余地がなかったといえましょう。交通事故で5才の坊やが死んだとします。はじめのうちはその事故状況を記事化するだけで精いっぱいでした。原稿を支局へ送り終えてホッとした時に、はじめて「あの坊やは気の毒だったなあ」と同情の念が沸いてきたものです。最初に同情の念に浸っている心のゆとりはありませんでした。まず記事化するため

の仕事が第一で、それから同情の念といった順番だったと思います。

ふだん取材で何回も会っていますと人情が沸いてきます。仕事を離れて、個人的な話になり、個人的にお手伝いしたこともあります。県警本部の捜査第二課長補佐と個人的に親しくなったさいに、高校生の長男が英語の勉強で手こずっているとのことで、数ヶ月家庭教師のボランティアをしたことがあります。夜おそく官舎を訪れて英語の勉強を手伝ったのですが、当時の警察の官舎はみすぼらしいものでした。そういうことを知るのも社会勉強のひとつだと思いました。

後につまらぬことで私が参議院選挙で選挙違反をしているのではないかというわさが金沢の記者仲間の中で立ったことがあります。誤解がふくらんでデマ情報が一人歩きしてしまったのです。私はその課長補佐のところへ行き事情を話しましたところ、地元署からそのような情報が上がって来ないと説明した後に「あなたの体に警察の指が一本たりとも触れさせるようなことはしません」と言ってくれたのでホッとしました。あの時のボランティア家庭教師のお手伝いに恩義を感じてくれているのかと思ったのです。と同時に自らが警察組織の人なのに、第三者的に言った言葉がとてもおかしく感じました。

たとえ取材の上で親しくなっても、その人の仕事に関したことで“社会的な正義”に反すると思われることに対しては心を鬼にしても書かなければならない、という体験をしたこともあります。

金沢市政の取材を担当していた時のことです。市教育委員会の学校教育課長補佐と親しくなり、ある日彼の机のそばのイスにすわって世間話をしていました。その時30代の女性が課長補佐を訪ねて、陳情したのです。病弱の子どもが4月から小学校に入学するのに近くにある小学校に行けずに遠い小学校へ通学しなければならないのを何とかしてほしい、という内容でした。

課長補佐の返事によると、道ひとつ隔てたところにある小学校は別の学区であり、女性の自宅住所の場合は、遠いところの小学校へ行くのが規則だから、例外扱いはできないということでした。女性は学区が異なることは分かるが病弱な子どものために何とかならないか、とねばるのですが、課長補佐は規則を楯に断る一方でした。女性はとうとうあきらめて去っていったのです。

私はすぐその女性を追いかけて自宅まで一緒に行き二つの小学校の位置関

武市 英雄

係を確かめる一方、子供の病状についても詳しく説明してもらいました。たしかに規則は大切でも、病状を詳しく聞こうとしないで断る課長補佐の態度もおかしいと思い、思い切ってこの記事のひとつの問題提起の形で金沢市内版のトップ記事に仕立てました。

記事を書きながら、これを載せると課長補佐は怒るだろうなと思い、少し迷う気持ちになりましたが、私情にかられてはならないと思い、思い切って載せたのです。

何年か経って私は東京本社へ戻りました。課長補佐とは毎年年賀状の交換はしていました。ある日、社に電話が入り、いま出張で上京中なので夕食を供にしたいとのことでした。夕食を食べながら昔話になったのですが、この話が出たのです。あの時、私は友人だから自分にとって不利になるような記事は載せないでくれるだろうと思っていたところ、そうでなかったので腹立たしく思ったとのことでした。しかし同時に、新聞記者として、たとえ友人にとって不利なことでも書かなければならない時はやはり書くのが当然なのだろうと思うようになった、とも言ってくれたのです。私の長い間気になっていたことがすっと消えていった感じでした。記者は友情よりも、もっと大きな大義のためにより忠実でなければならない、ということを知ってもらい、とてもうれしい気持ちになりました。

経過よりも結果が重んじられる仕事

金沢支局で学んだ第九点目は、新聞記者の仕事は結果のみで評価されるということです。たとえプロセスで一生懸命がんばっても、結果的には不成功ならば評価されません。学校では、テストの点が悪くても、授業に毎回出席していたから、お情けの評価がある場合もあるでしょうが、ジャーナリズムの仕事はあくまでも結果のみで評価されるのです。たまたま記者が腹痛のためにうまい文章が書けなくとも、一般の読者にとっては記者の腹痛はいささい関係がないのです。

たとえ努力してもまちがう場合があるのです。新人記者時代に石川県警本部を担当していたころ、他社の先輩記者たちが記者クラブでマージャンなどに打ち興じている間に私は各部署を何回も回っていました。それを感じに思ってくれたある刑事がこっそり私に教えてくれた情報がありました。福井県警から、照会があったある事件の回答内容でした。福井県内で発生した婦女

暴行事件の容疑者が金沢市内のトラック運送会社の運転手らしいとのことで、それに該当すると思われるトラックと運転手名を福井県警へ回答したわけです。

まもなく「事件が解決しましたので先ほどの手配は解除します」という知らせが福井県警から入ったために、私に事件発生を教えてくれた刑事はたっぷり、回答した金沢のトラック運転手が容疑者として逮捕されたと勘ちがいで、私に「あの男がつかまった」と耳打ちしてくれたのです。実際は福井県内の別の人が逮捕されたのでした。

私は記者クラブの連中に気づかれぬように、こっそり別の部屋から支局へ電話送稿しました。翌日朝、支局へ県警記者クラブに着いている旨の電話を入れたら、朝から大変な騒ぎになっているというのです。私の書いた容疑者本人から電話がかかり「私はこのように逮捕されていない」と抗議してきたのです。あとで刑事の勘ちがいであったことが分かるのですが、運転手の人権を著しく傷つけてしまったことはどのような言いわけをしても後の祭りです。当然本人の家と運送会社へおわびに行きました。まさかまちがい情報とは夢にも思わなかったわけです。刑事も足しげく通う私に手柄を立ててやろうという善意の行為だったのです。しかし、取りかえしのきかない誤報です。詳しい行きさつを説明した誤報訂正とおわびの記事を翌日掲載しました。いまならば運転手や運送会社の社長が私を訴えたら、罰金を払わざるを得ないでしょう。たとえ疑う余地がないにしても、この記事は県警本部として正式に記者発表した情報ではなく、一人の刑事が勝手に外部へもらした情報で、それを記者が裏付けを取らなかった責任があると判断されると思います。

このように他社の記者が遊んでいる時に働いても、まちがいをする場合があるのです。一生懸命働いていたから責任をのがれさせてもらうということではできないのです。仕事の途中は関係なく、評価が決まるのはあくまでも結果なのです。

このように私が新人記者として5年間過ごした金沢支局時代はいろいろ貴重なことを学ぶことができました。私にとってジャーナリズムとは何かの原点を学ぶ場になったのです。総じて金沢時代に私が追いかけていたニュースとは伝統的なニュースでした。つまり「異常」だから、「珍しい」からニュースにしたわけです。この「異常性・新奇性」こそがニュースであり、ニュ

武市 英雄

ースのすべてだと思っていました。この点に何ら疑問を抱いていませんでした。

この伝統的なニュース価値基準に少し疑問を抱くようになったのは1965年4月東京本社へ配置転換になった後のことです。

東京本社で出合ったニュース

当時もいまも同じだと思いますが、全国紙の場合、新人記者ははじめ数年間地方支局へ配置されます。これは一種の修業です。県庁所在地の地方都市にふつう支局が置かれています。県庁をはじめ地方の各種の役所があるとともに、国の出先機関もあります。一種のミニ首都です。支局員は10人前後ですから4、5年いれば警察、市役所、県庁、商工会議所、教育委員会、地元の大学など各分野を一通り取材体験することができるのです。その経験を通じて自分の得意分野が何であるかも自然に分かってくるでしょう。将来本社へ戻ったら、社会部記者になりたいとか、政治部記者になりたいとか、あるいは外報（信）部へ行って海外特派員になりたい、など自分の適性に目ざめます。

しかし、本社へ戻ってすぐにそのようなところへ直行できるのではなく、はじめの数年間は地方部整理課へ回されることが多いのです。つまり県版など地方版のレイアウトの仕事をさせられます。いままでは支局にいて記事を書いて本社へ送っていたのを、こんどは受け取る側の仕事を体験するのです。外回りの取材記者から内勤の編集記者になるわけです。見出しをつけたり、写真の大きさを決めたりして、一ページの地方版をつくり上げるのです。その前に支局から送稿されてくる記事内容を点検しなければなりません。意味がすっきり取れない文章は支局へ問いただす必要があります。若いうちに取材と編集の両方の仕事を体験することは大変大切なことなのです。とくに同僚や後輩記者の原稿を点検していると、記事の書き方の良し悪しがはっきり分かってきます。数年後に自分が再び取材記者になった場合、意味がすっきり通じない文章を書かないですむようになるのです。

私の場合はこの地方版の編集を1年3か月やりました。そして再び内信部というところで取材記者になったのです。内信部とは東京にいながら地方関係のニュースを追うところですよ。例えばある県の知事が県内のあるプロジェクトの予算獲得のために関係の中央官庁へ陳情に来たとすると、それを取材し

て、記事その県の県版へ送ってあげるわけです。

私ははじめ当時の厚生省とか自治省を担当し、ついで当時の建設省を担当しました。地方関係の道路、ダム、河川などの建設や改修工事などの記事を書いていました。と同時に私の勤めていた新聞社の中に元自治省事務次官を経験した副社長が主宰していた都市建設調査会といったサロンのような勉強会があり、毎月一回都市行政の専門家を招いて自由な討論をする会が開かれていました。建設省での読売の記者クラブには、政治部、社会部、内信部から各一名の記者が出ていて、この三人は都市建設調査会の事務局メンバーを兼務しており講師の先生の手配など下働きの手伝いをしていました。さらに毎月1回、「都市建設のページ」という1ページ全部を埋める署名入りの特集ページを作る責任も担っていたのです。

私は内信部所属の代表として建設行政を担当するとともに、先輩の政治部、社会部の記者と一緒に順番で「都市建設のページ」の特集記事も書くようになりました。署名入りで1ページを埋める特集ですので、名誉であるとともに、重い責任を感じる仕事でした。

1968年ごろから1970年3月までに私がこの「都市建設のページ」に書いた特集記事は、高速道路の建設、下水道の整備、公団家賃体系の問題、地方の空港建設、地価高騰対策、地盤沈下対策、ゴミ処理場建設問題など、都市問題、公害問題などに関したテーマでした。

このような都市の基盤整備や環境問題について取材し、特集記事にまとめているうちに、私はいままでのニュース価値基準に疑問を抱くようになりました。というのは、とくに環境問題、公害問題の記事では、人びとへの被害が起きてから、いくらその状況を詳しく報じて、手おくれであると感じたからです。

例えば地盤沈下問題では、東京都が東京の下町で、地盤沈下の定点観測を、数か所で行っていたのですが、例えば前年と比べて1センチ沈下したという記者発表の記事をジャーナリストたちが書いているだけでは、ダメではないかと思うようになったのです。当時は下町に密集している小さな町工場に工業用水網がまだ十分に整備されていませんでしたので、ほとんど、どの町工場も自分の敷地内に深い井戸を掘り、電動ポンプで水を吸い揚げて機械の冷却用水として使っていたのです。各工場と同じことを何年も行っているのに、とうとう地下水が枯れて、空洞化が起き、地盤が沈む現象が起きたわけです。

しかも、困ったことに、一度沈下した地盤は元に復旧しないのです。たとえ地下に水を入れ込んでも土地は膨れてきません。つまり、沈下した結果の数値だけを報道しても、後の祭りなのです。このようにならないことの警告的な記事こそ求められるのではないかと痛感しました。

伝統的なニュースは「異常性・新奇性」にあります。しかし、1年で1センチ沈下したということは1年365日で割ると、1日の単位では、とても目に見えない動きです。ぜんぜん「異常」ではありません。むしろ平常です。しかし、1年経ってみると、もはや取りかえしのつかない状況になっているのです。

このようなタイプのニュースはそれまでのジャーナリズムではもっとも不得手としていた種類の報道だと思いました。目の前にありありと見える異常な事態のみがニュースだと記者は信じてきたわけです。「日常性」はニュースにならなかったのです。しかし、この「日常性」は100%正常であったわけではないのです。かすかに異常性を秘めた日常性だったのにすぎないのです。いわば「静かなる殺人者」(Silent Killer)といえます。

それまでのニュース価値基準における「異常性」は、あまりにも24時間の中での異常性にこだわりすぎていたといえましょう。24時間という一日の単位を1か月、1年と広げて見ればやはり事態は異常性であることに変わりがないのにもかかわらず、ジャーナリストがいままでの惰性にとらわれて「一日の中だけでの異常性」にこだわって、視点を変えてみる発想がなかったといえると思います。これからは、もっと予防性、予告性、予見性のニュースが大切ではないかと痛感したしだいです。

と同時に、もうひとつ新たなニュース価値観に目ざめたのです。それは、断片的なニュースよりも、もっと「構造的なニュース」を重んじる必要があると思いました。とくに環境問題とか都市問題では構造的に社会を点検するのが大切だと思ったのです。例えば、工業用水網を整備したり、下水道の敷設を伸ばすことは、快適な都市生活を楽しむためによいことです。しかし、水を供給する山間部の人びとの生活を無視することができません。伝統的な集落はダムの底に沈み、地元の人びとは先祖からひき継いできた土地を離れなければならないのです。山間部の人びとが一方的に、都市部の人びとの快適な生活のために犠牲になるのは望ましいことといえるのでしょうか。

都市問題はひとつのゴムまりのようなものです。こちら側に指を押すと、

あちら側に圧力がかかってきます。一方が解決しても、それが他方での新たな問題を生むきっかけになる場合がたびたび生じるのです。つまり地域社会全体の発展のバランスを考えた報道をしなければなりません。社会の構造面をニュースにする必要がますますあるわけです。

日本の新聞社が都市・公害問題に本腰を入れるようになったのは1970年初夏だと思います。全国紙の本社のある東京の足元で公害が顕在化したのです。牛込柳町の大気汚染と青梅街道付近のある高校の校庭で起きた光化学スモッグ事件によって、各社がいっせいに環境問題に目ざめたといえます。私たち都市建設調査会のメンバーはその数年前からこの分野の問題に光を当てていたことを誇らしく思ったものです。

アジア関連ニュースに関心

1970年4月から上智大学新聞学科の専任講師になりました。前の日の3月31日付け夕刊で私はゴミ処理場の問題で署名入り1ページ大の特集記事を組んでいましたので、夕方「きょうで読売をやめます」とある先輩にあいさつしたら「君はゴミとともに去りぬか」とじょう談をいわれました。翌日上智大学のキャンパスに入ると、とたんに「先生」と呼ばれたので、とても不思議な感じがしました。なぜなら、一晩寝たら、自分の体が変わってしまったように思えたからです。

大学に移ってから、ニュースに関する本を読む時間的ゆとりも少しできました。その中でいろいろヒントを得ることができたのは日本新聞協会から発行されていた『新聞整理の研究』とか、関一雄の『新聞ニュースの研究』（厚生閣、1933年）とか島崎憲一の『現代新聞の原理ーニュース加工論』（弘文堂、1968年）などでした。

『新聞整理の研究』（初版）はおもだった新聞社の整理部の責任者たちの研究会が編集したもので、古今東西のニュースの定義が<原論的な定義><倫理的な定義>などと分類されている点が興味深く、ニュース概念について頭を整理するために役立つ本でした。

第二の関一雄の本は発行が昭和一ケタ時代の古いものですが、当時のアメリカのジャーナリズムやニュース論の著書を土台にして書かれているようで、参考になりました。とくに著者が伝統的なニュース価値基準として①時間的近接性②距離的近接性③著名性④異常性⑤進展性⑥情操性の6点を挙げ

武市 英雄

ているのが、こんごの新しいニュース価値基準について考えるのに役立つと思います。

第三の島崎憲一の本は、ニュース性の判断にはどうしても送り手の主観的な価値観が入り、客観性とは表現様式の枠内だけでのことである、ということ論じ、その意味ではニュースは本質的には加工されたものである、と論じている点は大いに納得できました。ニュースの機能を分かりやすく論じていると感じ、さらに自分なりにニュース論を展開していくのにより手がかりを与えてくれた本でした。

アメリカのマス・コミュニケーション研究者として有名だったウィルバー・シュラムが論じた即時報酬のニュースと遅延報酬のニュースという区分けも一理あると感じました。

ただ私が日本の新聞をはじめとするマスメディアで欠けているニュース価値の視点は他国との関係のニュース視点ではないかということをもまなく痛感するようになったのです。文化を越えたコンテキスト（背景、前後関係）のニュースがかなり欠落していると感じたのです。そのきっかけをつくって下さったのは上智大学の市谷キャンパスで1970年代初期にアジア研究室を開設していらっしゃるホアン・アンドレス神父（後に日本国籍を取り、名前は安藤勇）です。安藤師によって私はアジアの途上国の問題に“開眼”すると同時に、日本のマスメディアの欠けているニュース視点にも気づいたのでした。

ジャーナリストの第一線を離れて、大学という別の場に移っても、私のニュースへの関心は続いていきました。むしろジャーナリズムの現場にいただけでは気づかなかった新たなニュース価値観へのヒントが浮かんできました。大学での研究・研修活動が私にパラダイム・シフトを与えてくれたのです。

上智に移った翌年（1971年）8月、安藤師の依頼で私は京都ホテルで開かれた「アジア太平洋教育者・社会活動ワークショップ」にプレス係として参加、会の運営のお手伝いを3週間ほどしました。主催はフィリピンにあるイエズス会の東アジア社会司牧センターで、目的はアジア・太平洋諸国の学校の教員が地域社会の発展にもっと強い関心を持ちながら教育を行う必要がある、との自覚を高めることにありました。資金的にはドイツの教会団体からの全面的な支援がありました。

とくにアジア・太平洋に設立されたキリスト教関係の学校がエリート校化し、金持階級の子弟の教育が中心になり、地域の、その国全体の発展に寄与しているのかどうかを自己点検する必要があるとの意識が主催者側にあったと思います。

ここで知り合った各国の代表の人びとを手がかりに安藤師は1973年7～8月、ベトナムとタイへの研修旅行を企画しました。私も喜んで参加したのです。両国とも地元の大学教授に政治、経済、社会、文化に関する講義をしてもらうとともに、教育、文化、農業、社会福祉関係の施設を見学して回りました。

さらに翌1974年8月にはバンコクで開かれた「アジア・太平洋農・漁業指導者研修ワークショップ」にも日本の代表チームの語学のお手伝いとして参加しました。また1975年にはフィリピンのバギオで開かれた「宗教と発展」と題するセミナーにも出席。また1979年にはホンコンで開かれた「人的資源と発展」というセミナーにも参加したのです。いずれも安藤師が窓口になった会合で、私は東南アジア諸国の発展についての関心を高めていきました。

そのようなセミナーを通じて私は東南アジアの人びとが日本についてどう考えているのか、どう感じているのかを認識するようになりました。1970年代は日本の東南アジアへの経済進出は盛んで、タイやインドネシアでは反日的な感情もくすぶっていました。散発的に日本製品ボイコット運動が起きかかっていたのです。当時は日本からの輸出が一方的な片貿易でした。

セミナーでもそのようなムードが一部に見うけられました。食堂で日本チームの友人たちと朝食をとっていると、「ホンダ、アジノモト」とある国の人から言われたことがありました。「これだけ日本語を知っている」という親しみの言葉ではなく、「わが国は日本からの経済進出にほんろうされている」といった意味合いがあったのです。それは自虐的な顔を見ただけでも分かりました。1974年のバンコックでのセミナーでは、各国代表が自国の発展に関するレポートをしたのですが、日本のナショナル・レポートの後の質疑応答で「日本のアジアにおける経済進出と神道主義との関連性について説明してほしい」という質問がフロアーから出てきました。第二次世界大戦のさい日本軍部がアジアを侵略し、現地に神社を建てたことから、戦後の経済進出も神道主義がバックボーンになっているのではないか、という意味での質問だったと想像できました。

日本チームは山口県下の農家の人びとや県の農業改良普及員や山口大の農業土木の教授たちで、日本政府の代表ではありません。単なる民間人の寄り合いにすぎないのですが、そこにいる日本人は私たちだけですから、何らかの回答をする必要があったわけです。当然私たちは神道主義と経済進出は直接関係がない旨答えました。さらに団地のカギっ子問題など1960年代の高度経済成長後のひずみの状況についても詳しく説明しました。

このような体験を通じて私は当時の日本のマスメディアは東南アジアの人びとの気持を伝えていない、と痛感したのです。一方的な経済進出に反感を抱いている東南アジアのとくに知識層の声が、日本の新聞をはじめとするマスメディアにぜんぜん反映されていないことを大いに危ぶんだのです。

日本のマスメディアは国境や文化を越えて、人びとの心の中をどこまで伝えているのだろう、と心配になってきました。1970年代は国内の工場プラントで公害が起き、地域住民から強い抗議運動が起きると、その部分のプラントをそのまま東南アジアの発展途上国へ移すという企業が時おり見られました。そのような時、日本のマスメディアは日本国内だけでの解決ですべてが終わったかようになってしまいがちでした。公害輸出された相手側の国ぐに人びとの公害被害について配慮するようなニュース視点をほとんどのマスメディアは持ち合わせていなかったと思います。

つまり、ニュースというものが自国のコンテキスト、枠組みの中で位置づけられているだけではたしてよいのか、と強く私は疑問を感じたのです。つまりローカルな事例を見ながら、その中心にひそむグローバル性に気づく必要があります。大気汚染は国のいかに問わず避けなければならない問題であるはずなのに、報道者のニュース視点が地元、日本という枠組みだけに終わってしまったのです。最近グローカリズムという言葉が一部に使われています。ローカルな問題に取り組みながらも、そこにひそむグローバルな広がりの部分にも強い関心を持ち、行動していく必要があるでしょう。日本のジャーナリストもより広い視点、枠組みを持ってほしいものです。

とくに環境問題に国境はないと思います。環境問題は自国のみで解決しきれないところがあります。ジャーナリストが国境、文化を越えたコンテキストで、同じ地球市民の共感を持って報道する新たなニュース感覚、ニュース価値基準が強く求められているのです。異文化間の報道のさいは報道者が相手国の人の立場に身を置く努力が必要になるでしょう。自文化中心で報道す

ると、一方的な視点に立ったものになりがちです。

文化を越えた報道のむずかしさ

異文化を報道する時は、時に自分に異なる文化の相手を置いて考えてみる必要がありますが、それを実際に行うのは決してやさしくありません。

1989年秋から1990年春にかけミネソタ大学の客員研究員をしていた頃は、日本はバブルの最盛期でアメリカへの経済進出が活発でした。ソニーがコロムビア映画会社を買収したり、三菱地所がロックフェラー・センター・ビルに資本参加するなど、アメリカの文化的なシンボルが日本企業に買収されていることに対して、アメリカのマスメディアは日本に対して総じて反発的な報道をしていました。私は中西部の新聞に見られる対日イメージを3～4か月分の新聞記事から実証的に調査しました。

日米経済摩擦の責任は日本側にあるとする論調は圧倒的に多く、責任は日米両国、あるいはアメリカ側とするものはごくわずかでした。この調査の結果は1991年4月ハワイで開かれた第1回日米マスメディア会議（マンズフィールド太平洋研究センターと電通総研共催）で発表しました。

この時つくづく感じたのは国際間、異文化間のニュースというものは自国中心に報じられる傾向が強いということでした。1989年10月9日付けニューズウィークのカバーストーリーのタイトルはアメリカ国内版では“Japan Invades Hollywood”でした。「日本がハリウッドを侵略」という刺激的なタイトルをつけてアメリカ人の怒りをあおっている形でした。ところが日本人も読むかもしれない太平洋版になると“Japan Moves Into Hollywood”と少し刺激の度合いがトーンダウンします。「日本、ハリウッドへ進出」ですから少しおだやかになったわけです。さらに日本国内で売っている日本語翻訳版になると「コロムビア映画買収、ソニー進撃」というように主語が変わりました。この段階的な変化は読者層を考慮した販売戦略のように思えます。つまりアメリカ国内版では意図的にアメリカ人読者を怒らせて売ろうとし、太平洋版では日本の知識人も読むので少しおだやかにし、さらに日本語版では読者がほとんど日本人なので、主語を変えて、大げさな表現を抑えたと考えられます。センセーショナルリズムも営業政策によってトーンを上げたり下げたりしているわけです。

こういう日米両国間の経済摩擦のような問題はセンセーショナルに扱って

はぜったいに解決しないでしょう。もっと両国の政治、経済、社会の構造を分析するような冷静な報道が求められます。「大状況のニュース」を冷静に伝えるニュース視点がどの国のマスメディアにとっても必要だと思います。

上智大学の社会正義研究所での調査研究で一昨年南アフリカにおける難民調査をしました。そこで人間の和解はどのようにして得られるのか、それにメディアがニュース報道面でどうかかわるべきかを考えさせられました。まさに「大状況のニュース」です。

“大状況のニュース”の必要性

大きなコンテキストをニュースとして取り扱う必要性がとくに新聞など活字メディアにこんごますます高まってくるでしょう。例えば先の日本のアジアにおける経済進出に関する報道も、突きつめていくと「発展とは何か」という大きなテーマにぶつかることでしょう。1991年にカリフォルニアのパパメント大学の国際・異文化コミュニケーション研究者フレッド・カスマー教授が編集した *Communication in Development* と題する本（Ablex出版社）の第4章に *The Meaning of Development in Japan* と題する私の論文を収録させてもらっております。

私はその中で、発展とは「物質的発展」と「精神的な発展」の二型があり、さらに主たる行為者として「政府主導」と「市民主導」の二型があることを説明しました。その上で、明治期と、1960年代高度経済成長期とそのあとの公害発生の時期の二つの時代を対比して論じたのです。つまり明治期は「物質的発展」中心で政府主導型であったのに対して、1960年代高度経済成長期の後にひずみが起き、家庭内や学校内の問題が多発した時代は、「精神的な発展」を市民レベルから意識を高めていくムードが徐々に高まっていったと私は指摘しました。と同時にメディアは物質・精神両面での総合的な発展をグラスルーツ・レベルから意識を高めるきっかけや問題提起をすべきではないか、ということを主張しました。

社会全体をおおった問題をニュース化する必要性が、じっくり腰をかまえて報道しやすい新聞など活字メディアに大いに求められてくるでしょう。とくにこれからの時代は高齢化社会で、生きがいとか心の中の問題に重点が高まっていくと思います。マスメディアがインターパーソナルなコミュニケーションの役割を担っていく必要性が出てくると思います。心を語るニュース